

書 評

李礼『転向大衆：晚清報人的興起与転変（1872-1912）』
（北京師範大学出版社、2017 年）

呉 憲占

近年、中国近現代における新聞・雑誌に関する研究は豊かな議論を蓄積してきたが、その議論は大まかに二つのアプローチに分けられる。その一つは新聞・雑誌に即して、その内容と歴史的意義を考察するものである。もう一つは人物ないし事件に即して、新聞・雑誌を研究の素材として利用するものである。それに対して、本書は新たに別の道筋を切り開いた。すなわち著者は『申報』が成立した 1872 年から中華民国元年までの時期をとりあげ、新聞・雑誌の背後にある「報人」¹グループ及び彼らによる「抗議」に関する問題提起を行って、その歴史的意義を清末政治の変遷を軸にして検討し、マクロの視座に基づいた成果を生み出したのである。本書の構成は以下のとおり。

上篇：緒論／第一章 近代の社会変遷と報人群体／第二章 報館と報人：イメージと役割の変容／第三章 マスメディアの権力とエリート報人の誕生／第四章 古典的民意から報刊²による世論へ／第五章 言論活動による「抗議」の展開／第六章 社会動員と「怨恨」の激発、下篇：第七章 王韜：初期報人の意外な奮起／第八章 汪康年：伝統的知識人の思想的転向／第九章 章炳麟：新報刊と旧「革命」／第十章 梁啓超：国家主義的立場からの批判／結語／参考文献／後記。

本書の上篇では、近代「報人」の誕生と転向の動因、彼らの役割と社会地位の変遷、およびジャーナリズム観を扱うほかに、士大夫側に限られていた「清議」からマスメディアによる「抗議」への変容を手掛かりに、「報人」がどのように世論を動かして権力を獲得するのか、どのように社会動員を行う

のか、それが清末政治にどのような影響を与えるのかを、詳細に考察している。下篇では、上篇における清末「報人」群像に対する一般的な分析を踏まえ、代表的な「報人」を取り上げて、彼らの言論人としての生涯を追跡した個別研究を進めている。

著者によれば、清末「報人」の登場は、伝統士大夫が現代知識人になるルートの一つである（20 頁。以下、括弧内の数字は本書の頁数を示す）。当時、士大夫を中核とする伝統的社会秩序が崩壊に至りつつあり、国家の統治力の衰微に伴い、儒学の經典の指導的地位が動揺しつつあることもあり、伝統エリートは伝統の境界を越えて、権威の再築に役立つ途方を探さなければならなかった。かつてない深さと広さで社会に浸透してゆく意見と影響を及ぼす情報媒体としての近代「報刊」は、彼らの身の置きどころとなった。一方で、大部分の「報人」は自らの境遇と時局の変遷につれて、段階的に新聞業に従事したために、本書では彼らを「準プロな流動群体」と指している。それは中華民国時期のプロのジャーナリストグループと異なるので、本書では中華民国元年を分析時期の終点とした。

もし清末社会内部の変容が「報人」の登場の内因であれば、その外因は間違いなく外来の衝撃であろう。宣教師によるキリスト教会の「報刊」は、近代「報刊」と「報人」が伝統から受け継いだマイナスイメージと社会地位に、新たな価値を与えたのである（39 頁）。一方で、帝国主義的進出による植民地と租界は早期の「報人」を育む空間となる。その代表者として、王韜は香港において最初の中国人による中国語新聞紙『循環日報』を創刊した。さらに大陸から遠く離れた日本において、革命派と中国人留学生による「報刊」は満人政権の打倒という革命を煽る言論を絶えず大陸に送り込んだのである。そこで、外部からの衝撃は、清末「報人」グループの誕生と拡大に、空間及び心理上の二重の条件を準備した。

初期の「報人」の理解では、「報刊」は彼らが統治者に上書するために切り拓かれた官途以外のルートの一つに過ぎない。『循環日報』の紙面構成はなお「尊王」、「忠君」など儒家の正統意識により支配されたことが示すように、士大夫の精神は相変わらず王韜にとって根強く揺るぎないものであった（194 頁）。日清戦争後、政治の優劣と外交の成否に関する論説がしばしば「報

刊」に掲載され、統治者に進言する名目での批判も開始された。義和団の乱の後、社会の不満の矛先が清朝政府に向けられ、「報刊」はふたたび批判の先頭に立つようになった。章炳麟が 1901 年の『国民報』に「革命は避けられない」と断言したように、一部の「報人」は政府自体による内部的な変革に期待をかけないようになって、革命を志向するようになった。「排満」の風潮がますます厳しくなるにつれて、捏造、煽動報道などによる世論操作も稀なことではなかった。

「報人」の登場につれて、近代社会の世論もしだいに形成されてきた。君主政治の下に、士大夫が君主と民の意志を通じ合わせ、民に代わって統治者に請願すると自任していたが、これは「民意」をもって君主に圧力をかける手段であり、統治集団内部における矛盾の解決に向けたものにすぎなかった（87 頁）。士大夫自らの「清議」は体制内部に限られ、天下から国民国家への変遷の中に、近代中国が直面する危機には無力であったのである。「報刊」の誕生にともない、従来の士大夫に限られた議論する権力が大衆レベルに広がり、社会の縦の繋がりが緊密化された。こうして数量の多少により評価された「衆議」が「報刊」の世論として注目され、見えない「民意」が実体を借りて現れてくる（94 頁）。ちなみにその中で、『申報』が重要な役割を果たしたので、本書では『申報』が成立した 1872 年を研究とする時期のはじめとしている。

士大夫の伝統的な政治体制からの逸脱につれて、彼らの言論の性格は儒家の道徳の枠を突き破って、進言から抗議になりつつあった。張之洞の幕僚であった汪康年は張のもとを離れた後、梁啓超と一緒に上海で『時務報』を創刊した後、批判を天職にする「報人」の一生を送った。光緒新政において、取り締まりを強化するために公布された新聞法は、抗議の勢いを抑えるどころか、「報刊」による批判の空間を合法化して拡大した（134 頁）。それだけでなく、「報刊」に先導されて、ボイコット、デモ活動、座り込み、演説、請願など現代の社会運動が辛亥革命の前夜に続々と登場した。清朝の支配を延命させるための新政改革が社会の期待に対処できず、民間の怨恨を激発した。その結果、フランス革命と同じように、辛亥革命は支配体制の最も専制的な時期ではなく、支配者の改革により社会の束縛が弱くなった時に発生した

(149 頁)。

本書の優れた点の一つは、近代中国における歴史の断絶と継承を客観的に把握したことである。断絶について評者は、著者が伝統中国における「新聞」の歴史を振りかえったうえで、近代「報刊」に内包される公共性と対抗意識がかつてないものとなったと指摘した点を評価している。著者は西学東漸ないし和製漢語により新たな意味が与えられた言葉を歴史の現場に置き理解すべきだと強調したのである。他方、歴史の継承についての優れた点は、著者が近代社会の表象となる世論の発端を丹念に追跡したことから垣間見える。すなわち古代政権は元々「天命」ないし「天意」を通して自らの正統性を説明していたが、周代から「民意」が「天命」の象徴として、政治正統性の根拠となった。清末においては、君主政治の絶対性を排斥しようとする「報人」らの意識が「清議」の失敗を経て、最終的に革命を求める「世論」の形式を通して顕在化した。著者はそれを中国政治思想の文脈からいえば、「民意」＝「天命」だと理解したのである(86 頁)。

本書のもう一つの優れた点は、歴史学、コミュニケーション学、政治学、社会学など複数の学問分野にわたる学際的研究の試みである。著者自身は「本書は『歴史学』の成果とは言えず、参考文献を引用する時も『一次史料』の発掘より、既存の史料と成果を踏まえたものである」と後記で打ち明けている(339 頁)。しかし評者は、むしろ著者は公刊史料を着実に集めて活用して、ほかの学問をも視野におさめ、自分なりの見解を打ち出した点を高く評価している。例えば著者はウェーバーの「脱呪術化」概念に啓発され、「報刊」の紙面に掲載される皇帝と官僚の日常により、支配者の神秘性がしだいに解消したことが政治権威の下落につながったと考えている(106 頁)。そして、著者はコミュニケーション学の「共時性」の概念を援用して、「報刊」がどのように不満ないし革命な社会雰囲気をつくり出したのか、について新しい解釈を示した(174 頁)。

著者は学際的研究を進めるために、博引傍証し膨大な史料を調べ、本文の後に付け加える千余りの注釈も、その努力を裏付けている。著者はできるだけ多くの観点を読者の参考に供したいのであろう。しかしながら、著者が異なる学問分野の概念を援用する際、紙幅の関係が表面的な紹介に止まり、詳

細な展開を行っていない。繁雑ともいえる引用は本書の流れを断つだけでなく、自らの見解さえも遮断しやすいのではないかと評者は考えている。また事実関係では、中村直は中村正直の誤り（196 頁）、『国民報』の出版年にも誤りがある（254 頁）等々、細かな問題も散見される。

この本に提示される問題意識は、今日のマスメディアの社会における位置付けと政治との関係を考察する時に有意義であろう。とりわけソーシャルメディアは革命的な情報媒体として、従来の情報伝達のメカニズムを変えただけでなく、マスメディアと政治の関係を一層密接に結びつけた。例えば「アラブの春」の期間、エジプト・チュニジア両国の 8 割を超える利用者が市民運動関係の情報行動を Facebook において行っていたとされ、ソーシャルメディアの市民運動に与える影響は経験的証拠により裏付けられた³。新たなマスメディアが、清末に登場した「報刊」のように現実政治の変革を促すかどうか、歴史の成り行きにどのような影響をもたらすのかなどの問題を考える時、本書の考察は、参考になろう。

注

1 「報人」は近代中国のジャーナリストの前身と思われるが、両者の範疇と内容が完全に一致しないので、引用符を付け原文をそのまま使用する。

2 清末の「新聞」と「雑誌」を合わせて呼ぶ言い方。ただしこれらの刊行物の性格は、現在の新聞や雑誌とは異なる点もあり、引用符をつけて使用する。

3 Fadi, S & Racha, M. (2011) 'Civil Movements: The Impact of Facebook and Twitter.' Arab Social Media Report, 1(2), pp.1-29.

(https://journalists-resource.org/wp-content/uploads/2011/08/DSG_Arab_Social_Media_Report_No_2.pdf 2018/1/25 閲覧)